

社会福祉法人 清水あすなろ福祉会

法人だより

福祉情報を発信します

風の子保育園・あすなろの家・ともの家

No.16 平成31年3月20日

静岡市清水区山原 871-2
Tel 054-363-2046
Fax 054-363-0522

法人設立 40 周年・回想座談会

「たんぽぽ共同保育所 から 風の子保育園へ」

法人設立40周年にあたり、設立当時の保育の実態等を振り返りながら、あすなろ福祉会を創設し、風の子保育園設立に至った経緯や当時の苦労など、関係者の記憶を呼び戻していただきました。

……40年前の 働くお母さん達の切実な要求を実現するために

- ▷ **ポストの数ほど保育所を！** いまでは当たり前の。
- ▷ **長時間・土曜保育を！**
- ▷ **産休明け保育を！**
- ▷ **障がいのある子も一緒に保育を！**



40年前の当時を思い出しながら語り合う
座談会ご出席の皆さん

2月2日（土）午後1時半より、あすなろの家・地域交流室において、表記座談会を開催しました。理事・評議員・関係者も後方で聴講しました。

座談会には保育園設立に尽力いただいた方を代表して、建設委員長の成岡氏をはじめ7名に参加いただきました。杉井理事長の司会で、忘れかけていた皆さんの記憶を呼び覚まし、当時のご苦労などを語っていただきました。

共同保育所のたんぽぽ・ひまわりから始まり、長時間保育、産休明け保育、障がいを持つ子供も一緒に保育など、いろいろな要求をとりまとめて建設運動に。建設委員会でお金を集め、土地をさがし、諸団体や地元の皆さんの協力を得て、認可保育所・風の子保育園の建設に至りました。

当紙では座談会の概要と参加者のご感想を掲載いたしました。（詳細は本部HP掲載予定）



司会・杉井理事長

座談会には風の子保育園建設委員会委員長、事務局長も参加され、当時の保育や障がい児の置かれていた状況、働くお母さん達の切実な要求、そして認可保育所・風の子建設への道

が語られました。

40年前は、女性が結婚すれば「寿退職」が当たり前で、子どもが生まれても働くには勇気がある時代。そのため保育園は少ない上に保育は3時半まで、産休明けの0才保育はほとんどなし。

働く時間に合わせた長時間保育を望む切実な声に応じて、有志の自宅での保育から、保母・保護者による共同保育所たんぽぽ・ひまわりがつくられました。

一方で、「就学免除」と義務教育さえ差別されていた障がい児も一緒に保育を望む声も大きくなっていました。

こうした運動がひとつにまとまり、認可保育所建設をめざす運動が始まり、労働組合・婦人団体も協力し、寄付やバザーで資金を集め、地域の理解も得て風の子保育園建設に向かったのです。

座談会出席者のご感想

母親の願いから生まれた「風の子保育園」

成岡 敏雄（当時建設委員会委員長）

いつの間にか70歳を過ぎ、昨日のことも忘れてしまうことがある。だから、40年も前の記憶は定かではない。

「とうとうやったぞ！」…と男泣き！

でも鮮明に覚えていることは、落成式のイベントが終わり、建設委員の仲間が2階の屋根裏部屋に集まり、お互いの健闘を称え、夢の実現を喜び合いました。その時の、「とうとうやったぞ」という満足感、その日まで力を合わせた連帯感、思わず感極まり、男泣きしてしまいました。その光景だけは、今でも映像としてよみがえります。

そもそも、なんで私が、「建設委員長」という大役をやることになったのかが、謎なのである。金も無い、土地も無い、社会的地位も無い団体が私立の保育園を建設することなど、夢のような話である。

母親の情熱に押されて

今なら断っているが、私を揺り動かしたのは、母親の情熱に押されたことでした。また私も若かったのかもしれませんが。

毎晩のように共同保育所で行われた会議は、子供たちが走り回り、赤ちゃんが泣きだす、すさまじい会議だった記憶があります。そんな中でも母親たちは、どんな保育園にするのかを熱く語り合いました。その情熱こそが、保育園建設の原動力でした。

土地探し、資金集め、そして法人設立を

私に与えられた任務は、土地を借りること、建設資金を確保すること、そして社会福祉法人を設立することでした。

土地探しは、昨年亡くなられた栗田議員と、地元の農家や有力者の家を何軒も訪問しまし



た。建設資金は皆さんからの債券で一千万という大金を集めることができました。社会福祉法人の設立は、杉山早智子さんに書類をお願いしました。当時はすべて手書きだったと思います。法人の理事長については、地元でも人望がある、栗田議員のお父さんに無理をお願いしました。

こうして実現したわけですが、その陰には、栗田議員の力が大きいものでした。栗田議員とは、私の現在の仕事であるケアマネとして、最後まで看取りのお手伝いことができました。自分の意思や感情を表すことが困難になってきた彼が、風の子建設の思い出話をした時、涙を流して握手したことを忘れません。いろんな

ことがあったとは言え、彼にとっても大きな夢の実現であったことでしょう。

想いや情熱を持ち続けて…今でも

私は今、介護の仕事に携わっています。市役所で福祉の仕事をして、退職してからは、介護に対する自分なりの理念を貫くために、「くらしサポート」という小さい会社を始めました。考えてみれば、保育園建設が出発点だったかもしれません。あの時の想いや情熱は、今でも持ち続けているつもりです。

あれから40年、母親の願いがいっぱい詰まった「風の子保育園」のさらなる発展を願っています。

40年前-「風の子」を保育園名に、 「あすなろ」を法人名に-出発

杉山 早智子（当時建設委員会事務局長）

なつかしい人々の顔を前にして、40年もの年月を振り返り、興奮ぎみの気持ちを落ちつかせながら、わずかな資料の中から当時を思い起こすのは自信なく不安でした。

43年前（1976年）保育園建設のため、まず保育園の名前を「風の子」と「あすなろ」の二つから選択することになり、「風の子」を保育園名に、捨てがたい「あすなろ」を法人名に決めて出発しました。

「あすなろの家」「ともの家」 に繋がった法人の設立

このあすなろ福祉法人が後に「あすなろの家」、「ともの家」へと繋がって今日あることが奇跡のように思えます。

市民の力で取得した社会福祉法人だから、この後、障がい児(者)の施設も老人の施設もこの法人を利用してもらって作ってもらえばいい、そんなことを夢見て希望を語り合いました。それが実現したのです。すごいことです。

特に障がい児保育の実現のために、保護者

の地道な要求運動と職員の実践と研究が「ともの家」にも繋がっていったのだと実感します。

又、保育園とは桁違いの巨額な費用を要した「あすなろの家」の建設は多大な困難を乗り越えて今日があり、地域福祉を担うことになりました。

①産休明け0歳児保育②長時間保育 ③障がい児保育の実施を目標に

保育園建設当時の三つの目標、①産休明け0歳児保育、②長時間保育、③障がい児保育の実施、そして法人の三つの願い、①保育園、②障がい児施設、③老人施設を作るという事業を成し遂げて地域の社会福祉の砦となって根をおろしているのだと感慨もひとしおです。

会の中で「組織を動かすのは人、気持ちを受け継いでいく」ということばの中に、これからの希望の光を見る思いでした。この機会を得て心から感謝です。



福祉制度
を考える

「幼児教育・保育の無償化」に疑問？

…子育て支援はこれだけ？
先にやることがあるんじゃないの？



「幼児教育・保育の無償化」は、今年10月、消費税の10%への引き上げと同時に「3歳以上の幼児の費用の無償化」が実施されます。（財源は19年度は国が全額、20年度以後国が2分の1、都道府県と市町村が4分の1づつを負担）

「無償化」そのものは歓迎するが

この保育料無償化そのものは歓迎できますが、待機児童問題や保育士確保の問題が棚上げされたなかで、すべての子どもの育ちを支える保育の質の確保になっていないことが問題です。

待機児童はなくなっていない

待機児童問題については、幼児保育料無償化ならば乳児も預けたいという希望者が増え、兄弟が別々の園に入園せざるを得ない事態が発生し、数字に現れない待機児童が増えました（特に1歳児）。現に役所は、1歳児枠をもう少し広げてもらえないかと聞いてきました。

今年度の1歳児の入園希望は、7人枠に対して15人の希望者があり狭き門でした。さらに新入園児希望全体数は39人といつになく多い年だったことを物語っています。

保育の質確保にはもっと処遇改善を

保育士確保問題については、保育士の処遇を改善するような手立てをとることが必要です。ここ数年、処遇改善費が加算され、職員給与は少し改善しましたが、まだまだ十分とはいえません。

子育て支援に優先すべきは

風の子では保育の質を確保するため、最低基準を上回る保育士を配置しています。1本の羊羹を何人でわけあうのかは、限られた国からの財源のなか保育の質の担保と密接な関係にあり、保育士確保の問題につながり、待機児童問題まで続いています。

ドリームプラザに虹が！

ともの家・30周年記念イベント

もっともっと生きている幸せを

年明けの12日に、清水ドリームプラザにて、30周年の記念イベントを開催した。

よくぞここまで継続できたという安堵の気持ちと同時に、ステージ袖から見た、会場の皆様の暖かい笑顔と拍手に感動し、あのステージで自らを主張した仲間や職員の姿に、これからもっともっと生きている幸せと価値を感じて欲しいと思った。

“人が人として生きる場所”がともの家

職員の人材不足と低賃金は現実問題とし

て直面している。やりがいだけでは生活できないこと、これもまた現実である。

しかし、この場所には、人として忘れてはいけない、ありのままを受け入れる優しさと、笑顔と活気がある。“障がいがあるなしに関わらず、人が人として生きる場所”として、今もこれからもあり続けることが、「ともの家」の向かうべき場所だという思いを強くした。

—30年目の節目に—

ともの家施設長 滝戸恵美

